

くまにち

# 論壇

作家



## 高村 薫

たかむら・かおる 「マ  
ルクスの山」で真木賞。作  
品に「王の記」「我が少  
女」など。67歳。

昨年7月の記録的豪雨は、氾濫した球磨川流域で50人が死亡、6千戸が浸水する大規模災害となった一方で、2008年に白紙撤回された支流の川辺川のダム建設計画が甦るといふ奇貨をもたらすことになった。因みに、こうした人心をゆるがす自然災害などの危機に便乗して改革を進めることを「ショック・ドクトリン(惨事便乗型資本主義)」と呼ぶそうだ。もちろん、熊本県の今回の決断は地域住民の安全のための苦渋の選択であり、けっして偏った利益誘導などではないが、球磨川の氾

濫というショッキングな事態が人心を動かしたのは事実だし、そして動かされるのは人間の性でもある。とまれ、甚大な被害を受けた人びとにとって、それでもなおダムは要らないという選択肢はなかったかもしれないが、そのことと今回建設が決まった治水専用ダムなるもの当否はまた別の問題である。新聞各紙の報道によれば、ダム潮をつくらない流水型ダムは全国にも基しかなく、国土交通省は詳細なデータも公表していない。そのため、実際にどの程度環境保全につながるかは不透

明なほか、仮にダムができた場合、たとえば人吉市中心部の浸水面積を6割減らせるという国土交通省の推計もあれば、いやもつと少ないといふ別の専門家の推計もある。

そんな状況だとすれば、このダム計画に異論が出るのもつぎぎる話ではあり、当初からダム計画に反対してきた地元の市民グループは、河

## 球磨川「水」

道掘削や川幅の拡張など、いまもダムに頼らない治水を求めていると聞く。地元民ではない筆者にはどちらに理があるのか判断できないが、ダム容認派と反対派のどちらにも弱みはある。

たとえば今回の流水型ダムは、県が住民の安全と清流保全の二兎を追った末の選択である。だとすれば、

ダムをつくりたい国交省がいくら太鼓判を押しても、治水面でも環境面でも妥協の産物になるのは想像に難くない。しかも、ダム建設はひとたび始まったら止まらない巨大公共事業の典型でもある。

またさらに、これは完成まで何年かかる話なのだろうか。すでに地元の高層や水没地の移転先の整備は終

そいた過疎と高齢化が大きく作用していたと言われている。高齢化は球磨川流域も例外ではなく、ダムが完成しないうちにまた豪雨災害に見舞われるようなことがあれば、どんなにつくしい清流が残っても、地元を離れる人は出てくるだろう。

一方、ダムに頼らない治水のほうも、白紙撤回から12年経っても何一

の調整は、個々に多少の損得が生じることを受け入れることで図られるほかないが、前回の計画はそこにまでも至らなかったようだ。

さてここで、一物書きが第三の道などと言いたすことをお許しください。すなわち、建設してもしなくても双方に少しづつ禍根を残すことになるだろうダムではなく、むしろ危険度の高い区域には人が住まないというシンプルな選択もあるのではないかと。昨年9月に施行された改正都市再生特別措置法に基本的な考え方が盛り込まれている災害レド・ゾーン・イエロー・ゾーンである。人口が密集する都会では難しいが、球磨川流域なら現実味があるのではないだろうか。

地元では、治水の一環としてNPOが森づくりなど新しい地道な活動を行っているとも聞く。確実に人口が減つてゆく未来では、間違はなく自然の力が主人なのである。

## 第三の道「はないか

わっているため、5年ほどでダム本体は完成するといふ声もあるが、知事は地元の根強い懸念を受けて環境アセスメントも求めており、そんなに順調に事が運ぶとも思えない。

東日本大震災の被災地では、町の復興に時間がかかりすぎたことで多くの住民が故郷を離れる結果になったが、そこにはもともと被災地が抱

つ決まらなかったのが現実である。随時報じられてきたように、工期や事業費をめぐって国と流域自治体の協議がなかなかまとまらなかったのだが、これは東日本大震災の被災地復興でもしばしば繰り返されてきた問題である。高い理想はあっても、いざ現実となると、それぞれに抜き差しならない利害の衝突がある。そ